

歌舞伎淑女録

江戸のキャリアウーマン

水落潔

歌舞伎淑女録

江戸のキヤリアウーマン

水落潔

水落 潔 (みずおちきよし)

1936年大阪に生まれる。早稲田大学卒業後、毎日新聞社入社。学芸部副部長を経て、現在、学芸部編集委員。幼少の頃から歌舞伎、文楽などの古典芸能に接し、上方歌舞伎には特に造詣が深い。1970年から毎日新聞演劇評担当。著書に『とうざいとうざい』(片岡仁左衛門聞き書き・自由書館)『人形遣いの基礎知識』(国立劇場)『文楽』(新曜社)『歌舞伎紳士録・江戸のシティーボーイ』(鎌倉書房)。

歌舞伎淑女録・江戸のキャリアウーマン

一九八九年十一月一日 初版発行

著者 ——— 水落 潔

発行者 ——— 長谷川正承

発行所 ——— 株式会社 鎌倉書房

〒一六二東京都新宿区市谷左内町二二

電話 (〇三) 二六八一三〇六 (販売部)

二六八一四五二 (編集部)

印刷 ——— 株式会社精興社

製本 ——— 共同製本株式会社

歌舞伎淑女録♥江戸のキャリアウーマン 目次

歌舞伎のなかの女たち

8

お嬢さまとギャルたち

13

お光 新版歌祭文——あの日はもうかえつてこない

14

清姫 日高川入相花王——燃えさかる嫉妬の炎に身を焼かれ

18

お里 義経千本桜——煮えきらない優男の正体は……

22

朝顔 生写朝顔話——深窓の令嬢、一目惚れの恋のゆくえ

26

おみの 元禄忠臣蔵——愛はまことか偽りか

30

時姫 鎌倉二代記——敵と味方にわかれた恋人たちの宿命

34

お半 桂川連理柵——四十路がたんといとしい十四歳

38

照手姫 当世流小栗判官——災難を糧に強くやさしい女性に

42

お三輪 妹背山婦女庭訓——恋や恋、身分ちがいの恋の卒環

46

八重垣姫 本朝廿四孝——絶体絶命の許嫁、救う道はただ一つ

50

桜姫 桜姫東文章——翔んでる姫君の真実さがし

54

妻として母として

59

おさん

心中天網島

夫の愛人に文をしたためた妻の決意

60

おとく

傾城反魂香

夫の才能を信じ一心同体の氣ばたらき

64

相模

一谷嫩軍記

身代りに討たれた子、討つたは夫

68

玉手御前

摂州合邦辻

継子に恋をしかけた理由は……

72

お峰

怪異談牡丹燈籠

大金につられて恩人を裏切ったものの

76

お園

艶容女舞衣

愛人に子まているとは知らずにとついで

80

お軽

仮名手本忠臣蔵

あなたしかみえない……

84

お種

堀川波鼓

夫は單身赴任、ふとしたはずみで不倫

92

葛の葉

芦屋道満大内鑑

狐の恩返し、女房奉公の愛と哀しみと

96

お谷

伊賀越道中双六

相思相愛の夫婦を引き裂く武士道とは

100

錦祥女

国性爺合戦

思いがけない再会に流れた赤い涙

104

お米

暗闇の丑松

一途な男のまことがうらめしい

108

覚寿

菅原伝授手習鑑

娘にふりおろした杖が痛い

112

微妙

近江源氏先陣館

仲の良い息子が敵と味方にわかれたとき

116

お岩 東海道四谷怪談——死んでもわたしは武士の娘

120

袖萩 奥州安達原——エリート一家の落ちこぼれ

126

お幸 双蝶々曲輪日記——子ゆえの闇に迷う永遠の母

130

淀君 沓手鳥孤城落月——虚空に消えた大いなる幻影

134

千代 菅原伝授手習鑑——忠義のためにわが子が身代り

138

果 伊達競阿国戯場——怨霊は心のなかに棲むという

142

お吉 女殺油地獄——世話好きの人のよさにつけこまれたか

146

戸無瀬 仮名手本忠臣蔵——義理の娘なれど幸せを願う心は人一倍

150

江戸のキャリアウーマン

155

揚巻 助六由縁江戸桜——江戸っ子の美学そのままを生きた女

156

お菊 番町皿屋敷——信じてはいても心の奥を確かめたい

160

梅ヶ枝 ひらかな盛衰記——花よりいつそう花らしく

164

尾上 加賀見山田錦絵——異例の出世。それが反感をかって……

168

梅川 冥途の飛脚——しつかり者の遊女が選んだ滅びの道

172

お富 与話情浮名横櫛——初心な男を狂わせる仇な魅力 176

お園 彦山権現誓助剣——男まさりの武芸者がはじめてみせた女の顔 180

八ツ橋 籠釣瓶花街酔醒——心ならずの愛想づかしが切った命の絆 184

静御前 義経千本桜——うたかたの世にひたすらな愛を舞う 188

滝川 網模様燈籠菊桐——小悪党に惚れられ惚れた奥女中 192

政岡 伽羅先代萩——犠牲になったわが子をはめる烈女の本心 196

三千歳 天衣紛上野初花——いとしさのつて一日千秋 200

お初 曾根崎心中——追いつめられた恋人たちの選択 204

美代吉 八幡祭小望月賑——失恋の八つ当りが命とりに 208

小萬 盟三五大切——手練手管も波の間に間に 212

十六夜 花街模様薊色縫——運命にあやつられた泥まみれの純愛 216

雲の絶間 雷神不動北山桜——色香でまどわす必死の行法破り 220

INDEX(索引)

装丁・デザイン 石黒紀夫

錦絵協力 国立劇場

企画・編集協力 澤木智恵子

歌舞伎淑女録

江戸のキャリアウーマン

歌舞伎のなかの女たち

歌舞伎が生まれ育った江戸時代、女性たちは独立した人格を認められず、家や男性に従うものとみられていた。

女性の最高の美德は貞淑さと慎しみの深さ。子供ときは親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従うという「三従」の掟まで生まれた。個人の自立や尊厳は無視され、身分や年齢によって一括分類してとらえたのである。

これは、歌舞伎や文楽をみても明らかである。

文楽は人形芝居だから、顔にあたるところは「頭」^{かしら}とよぶ人形の顔をつかう。頭にはさまざまの種類があつて、特に男の頭は性格や身分により、三十種類以上ある。

ところが、女の頭はわずか七、八種類、しかもふつうの女性の頭は「娘」「老け女形」^{おやま}「婆」の三種類しかない。つまり未婚の女性は身分を問わず娘の頭をつかい、結婚すると老け女形、年をとると婆の頭をつかう。

あとは遊女を示す「傾城」^{けいせい}と三枚目の「お福」、悪女の「莫耶」^{ばくや}、鬼女の「がぶ」ぐらい。つ

まり、すべての女性を、年齢による三つの分類に、遊女、醜女、悪女を加えた六種類でとらえていた。ここでは、女性の職業として独立して存在するのは遊女だけ、ということになる。

このように、人間性の最もよくあらわれる「顔」にはほとんど差がないのは、女性は男性に従って生きるものゆえさして区別する必要はない、女性を描くにはそれだけの区別で充分である、と考えたからだろう。それが江戸時代、言いかえれば歌舞伎の世界の女性の姿だったのである。

身分や生活状態のちがいは、髪や衣装で変化をつける。お姫さまは「吹輪」という髪に結び、武家女房でも奥につとめる身分の高いお局とか中臈といった女性は「片はずし」に結う。腰元は帷茸のような「文金」、老女になると「喝色」という髪になる。

町人の場合、娘は「結綿」や「高島田」で、人妻は「つぶし島田」。遊女も最高位の太夫は「立兵庫」、次の新造という位になると「兵庫」、安女郎は「切れ天神」と、身分によって画然とした差がある。

衣装も、その色で身分と年齢を表現する。大名や身分の高い武士の娘は、赤い着物に襦袢は白。通称「赤姫」とよぶのは、高貴な姫君が必ず赤い振袖で登場するからである。

同じ娘でも、町娘は桜色や水色の華やかな中間色の振り袖、田舎娘は浅葱（薄い青）か萌黄（黄緑）、あるいは黄八丈のような縞物になる。また、女房は町人、武家を問わず、鼠色か藍色系の色の濃い、地味な着物で登場する約束になっている。

このように、年齢と身分によって、髪型と色でいくつかに分類された江戸時代の女性たち。しかし、同じように化粧し、同じ着物を着ていても、人間は決して一様にはなれない。赤い振袖を

着たお姫さまも一人ひとりみると、恋もすれば嫉妬もする。貞淑がいかに美德であっても、激情のあまり身をあやまる人妻もでてくる。これこそ、人間が人間であるかぎり、いつの時代でも変わらない姿である。

今日と江戸時代とで、人間の本質にちがいはあるわけではない。ちがうのは建前と本音である。ことに喜怒哀楽という人間本来の情を「男に従う」というモラルで抑圧されていた時代には、両者の距離は逆に今日よりへだたり、葛藤や矛盾が生まれる。

「忠義」が最高の道徳とされていた当時、主君の子の身代りにわが子を犠牲にするのはあたり前の行為だった。「寺子屋」や「熊谷陣屋」はそうした話をつづっている。

しかし、いつの世にわが子を殺して平然としていられる母親がいるだろうか。いくら夫に従い、主君に忠義をつくすことが正しいとされても、建前は建前として母の嘆きは深い。しかも、忠義という封建的道徳のもとでは、怒りや悲しみを叩きつける対象がないから、その感情はよけいに深刻で、世の中の仕組そのものへの批判性をもつのである。

また、一方では「三従」の掟に背いてしまった女性がいる。

ふとしたはずみで不倫をはたらく人妻、子ゆえに世のきまりに背く母親。娘たち、遊女たちにしても同様である。恋に生きようとすれば親を裏切り、あるいは廓の掟を破らねばならなかった。それは社会秩序に対する反逆であった。

現代なら、女性がわが道を生きようとするなら、それ相応の手段がある。しかし、家や男性に「従う」ことが人生だった当時の女性たちは、社会の道徳に背いたために世の指弾をうけ、不幸

な人生を歩むことになる。

だが、そうした二重三重の束縛のなかで、女性たちは精いっぱい、自分の人生を生きようとつとめている。江戸時代につくられた歌舞伎が、いまも生命をもっているのは、社会と人間の本質から生まれる相剋を描き、それが時代をこえた普遍性をもつからだろう。

この本は、数多くの歌舞伎の作品のなかから五十人の女性を選び、彼女たちが社会的、身分的制約のもとで、あるいはそれに抵抗して、どんな人生を歩んだかを探ろうとしたものである。

なお、五十人を選ぶ際に考慮したのは、次の四点である。

まず、作品が有名で、多くの歌舞伎ファンになじみのある女性であること。

次に、原則として一作品から一人の女性を選んだこと。なるべく多くの作品を扱うことによって、そこに登場する女性像を通して作品自体に関心をもってもらいたいからである。

三つめには、特定の時代や作者にかたよらず、歌舞伎史の流れのなかから広く選んだことである。ひと口に歌舞伎といっても、三百年以上の歴史があり、女性のとらえ方も時代によってさまざま。戯曲の文学性だけにとらわれず、選択にはそうした流れも念頭においた。

四つめには、できるだけドラマティックな人生を歩んだ女性を選んだことである。そのため、有名な作品のヒロインであっても、「阿古屋」のように俳優の風情や芸でみせる役ははぶいた。また、同じような生き方の複数の女性がいたときは、代表的な一人にしぼった。「かさね」のように舞踊劇として有名だが、前後の場が上演されないものは、あえてその元になった作品によって人物像を引きだすことにした。

これらの理由のため、有名なヒロインでも割愛したものもあるが、その点はご了承くださいた
いと思う。

この本では、そうした五十人の女性の生き方を探り、同時にそれを演ずる俳優たちが、真実を
描くために彼女たちの人生をどう解釈し、どう表現しようとしているのか、そのひと口芸談を随
時加えて構成してみた。

現代人の目からみると、歌舞伎のなかの女たちは納得できない生き方をしているかもしれない。
しかし、どれほどの大事件（戦争さえ）も、結果を知っている後世の人間からみれば、おろかだ
ばかばかりくみえるものである。そして、それをおろかだと言いつけるのは、後世の人間の傲慢と
いうものであろう。

文楽の頭では数種類にしか分類されていない女性たちが、ここでは五十人五十様の人生を送っ
ていることがわかりただけだと思う。

妹将山御殿の場

かみ

お嬢さまとギヤルたち



あの日はもうかえつてこない

お光

新版歌祭文

野崎村の百姓・久作きさくの娘。実
は女房の連れ子。大阪の質店
油屋の丁稚・久松ひさまつと許嫁。
十五、六歳。

お光は父久作から「ちようどいい折じや、さつそく今日久松と祝言さそう」と言われて、うれしさに胸がはじける思いがした。実をいうと、お光は久松と祝言をあげることを半ばあきらめていたのだった。

たしかに二人は親のきめた許嫁である。幼いときから兄妹のように育ち気心は知れていた。しかし、久松が大阪の質店油屋へ丁稚奉公に行つてからは、年に数度しか逢う機会もなく、田舎育ちのお光とちがつてだんだん洗練されていくのが気がかりだった。しかも、ちらと耳にしたところでは久松は主家の娘のお染と恋仲になり、今日、ここへもどされてきたのも、どうやらそのことと関係のある様子である。

だが、お光は心底久松が好きだった。だから、もどつてきたときは気もそぞろに浮きたち、心はずんだのである。それが、鳥が飛び立つようなあわたたしさに今宵祝言とは……。

お光は、「日頃の願いが叶うたも、天神さまや観音さま、第一は親のおかげ」と手をあわせた。